

D. H. ロレンスのアニミズムについて

古 我 正 和

I

自然はわれわれ人間がこの世に出現するよりもずっと前にすでにあったが、この世に姿を見せて以来、人間は自分の身の周りの自然と対話しながら自然と共に生きてきた。自然は生きていて、外界に対していろいろな反応をする。植物の場合でも光にたいしては顕著な反応をしている。その顕著な例がひまわりであって、その名前が示す通り朝は東を向き夕方には西の方を向く。落葉樹も一年の季節感をわきまえていて、春には新芽を吹き、夏に成長し、秋には実をつけて葉を落として冬に備える。

このような自然の営みを見て、人は同じ生き物としての親しみを感じ、文学や音楽などで自然に呼び掛けてきた。そして人間の在り方についても自然からいろいろと学んできている。

特に東洋、とりわけ日本では、人間の生き方に自然を取り入れることが、古来、西洋よりもはなはだしいように思われる。奈良時代の万葉集にみられる大和の山とか、平安時代の京都を取り囲む山々や曙の表現の中に、このことがうかがわれる。

ところで、自然の観察による科学上の新しい発見から、その自然観にも時代と共に移り変わりがあることが最近分かってきた。耳を持つものは人間だけだと思われていたのが、最近、自然にも「耳」があるということが分かってきたのである。

乳牛に明るい音楽を聞かせるとミルクの出が良くなるという話は以前からきいていたが、花も音に反応を示して鮮やかな色になるというのは、どうも気の

せいだけではなく、花も音を聞いているらしいということが最近分かってきた。植物の葉の一枚一枚に電極をつけて表面電位を測定すると、クラシック音楽では落ち着いた気分になって反応が抑制され、演歌や打楽器では植物は興奮して反応が著しく促進されることが分かってきたのである。

人間に次いでこの地球の支配者となるのは、ウィールスだろうと言われている。現在恐れられているエイズウィールスのことや、また近年アフリカで発生したエイズに似た高い死亡率の病気の事を考えると、これは決して故なきことではないと思われるが、それらは人間よりもはるかに高度な仕方で伝達をおこなっていることになる。

このことから分かることは、ただ感覚では捉えることができないだけで、今までわれわれが思いもよらなかった伝達の現象が、思いもかけない所でおこなわれているということである。さらにまた、われわれは傲慢にも今まで自然界のことが分かった、分かったといってすべて認識したかのように考え、多くのことを見逃してきたことになるのである。

鳥が鳴くのを聞いていると、いろいろな鳴き方がることがわかる。ものの本によると、鳥は賢い鳥でいろいろな複数の情報を互いに伝え合うのだそうである。鮭や鱒が自分の育った川へ必ず帰ってくるのも不思議な事である。彼らは人間よりももっと精密なしくみで、互いの伝達を行っているのかも知れない。

II

ところでロレンス (D. H. Lawrence, 1885—1930) は、従来の伝統的な観方で自然を見なかった。彼は近代の機械文明の発達によって次第に狭められてゆく自然を前にして、その自然を元のままで保とうとした作家であった。

彼の初期の作品の中にもすでに、自然物の中に生命を見いだす考えがみられる。『息子と恋人』(Sons and Lovers, 1913) では、主人公のポールにとっては自然は何物にも汚されることなく生き生きと存在している。炭坑が盛んに活動し休閑地の若麦が絹のように輝く情景を前にして、ポールは母親と次のように

語り合う。

“The world is a wonderful place,” she said. “and wonderfully beautiful.” “And so’s the pit,” he said. “Look how it heaps together, like something alive almost—a big creature that you don’t know.”

“Yes,” she said. “Perhaps!”

“And all the trucks standing waiting, like a string of beasts to be fed,” he said. ...

“But I like the feel of *men* on things, while they’re alive. There’s a feel of men about trucks, because they’ve been handled with men’s hands, all of them.”⁽¹⁾

ポールは景色だけではなく、炭坑も美しいと言う。炭坑が何か未知の大きな生き物のように盛り上って見え、トロッコが食べ物を待ちうけるように一列に並んでいるのを見ると、人間がみずからの手でそれらを作ったのだと感じられて、愛着を覚えると言うのである。このように、ロレンスの自然の描写の中に自然の神秘が感じとられ、その動植物の描写の中には、人間の支配から脱却した自然の姿を読み取ることができる。

モレル一家の住んでいるのはザ・ボトムズ (The Bottoms) で、階級のはっきりしている英国においては文字通り「底辺」である。坑夫という職業柄とはいえ、モレル一家がそのような場所へ引っ越して来たのは、誇り高いモレル夫人や子供たちにとっては決して満足のできるものではなく、夫人は心の片隅に言いようのない怒りをつのらせてゆく。ポールと母とがミリアムの家を訪問する途中、美しい自然に混じって炭坑の姿が眼に入るが、それは次のように描写されている。

Minton pit waved its plumes of white steam, coughed, and rattled hoarsely.⁽²⁾

上の文章の中にみられる coughed (咳をする) や hoarsely (しわがれた声を出して) は人間や動物がするしぐさである。また plumes はここでは蒸気がゆらゆらと立ち上がっていくのを指すが、もともとは鳥の羽の意味である。ミント

ン炭坑が白い蒸気を出し、咳をして、しわがれた声を出してガタガタ鳴っていた、というのである。ポールは母親の怒りをよそに、美しい自然に抱かれた炭坑を生き物のように親しみをこめて眺めている。この表現の中にはアニミズム的なものが見られる。

ロレンスはイタリアのトスカーナ地方に滞在したことがあるが、その地方はローマ人に滅ぼされた古代国家エトルリアの遺跡がある所である。今ではそこにこんもりとした糸杉が密生しているが、かつてローマに全滅させられ、その独自の言語を後世に伝える者は誰一人なく、その遺跡は今は空しくその神秘的な姿を留めているのみである。ロレンスはその糸杉の林に古代エトルリアの象徴を見るのである。糸杉は次のように描写される。

Folded in like a dark thought,
For which the language is lost,
Tuscan cypresses,
Is there a great secret?
Are our words no good?⁽³⁾

糸杉を dark thought に包まれると表現すること自体がアニミスティックであるが、その暗い謎を表現するための言葉はない。これは古代ローマに皆殺しにされて、誰一人それを伝える者はいないという意味の他に、糸杉という、ものの言わぬ植物には語ることができないという意味も込めている。ロレンスは糸杉に語りかけるが、その言葉は空しく消えるだけである。では空しく消えるままで終わってしまうのだろうか。ロレンスは次のようにうたう。

They say the fit survive,
But I invoke the spirits of the lost.
Those that have not survived, the darkly lost,
To bring their meaning back into life again,
Which they have taken away
And wrapt inviolable in soft cypress-trees,
Etruscan cypresses.⁽⁴⁾

ロレンスは進化論の基本理念である「適者生存」に疑問を持つ。生きのびることのなかった地球上の不適合者、自然淘汰された者たちに対して限りない哀れみを持ち、逆に滅び去った者の霊を呼び戻したいと言うのである。the darkly lost とはローマ帝国に闇のうちに黙らせられ滅ぼされたエトルリア人のことである。ロレンスはこの静かな糸杉の中に、その意味が侵しがたく包み込まれているのだと言うのである。イタリアに限らず世界のいたる所でロレンスが出くわし、彼の作品の中でしばしば述べている地霊 (The Spirit of Place) は、彼のアニミズムを示す重要な言葉である。このような考えの中に、ロレンス独特の自然観がアニミズムの形で表れているのが分かる。

III

次いでロレンスが動物に対してどのような考えを持っていたかをみてみよう。ロレンスの親友であったオルダス・ハクスレイ (Aldous Huxley, 1894—1963) は、ロレンスと動物について次のように述べている。

He could get inside the skin of an animal and tell you in the most convincing detail how it felt and how, dimly, inhumanly, it thought. ... To be with him was to find oneself transported to one of the frontiers of human consciousness.⁽⁵⁾

これは非常にうまい表現である。その時までにはヨーロッパでは、たとえばソップ物語とかガーネット (David Garnett, 1892—1981) の『狐になった夫人』 (*Lady into Fox*, 1922) など、動物が描写された文学が多く書かれていたけれども、それらはあくまでも動物を擬人化し、動物に人間の代わりをさせたにすぎないもので、それを通して人間に教訓をあたえようとするものであって、動物の中へ入り込みその動物がどのようにものを感じ、どんなに微妙なやり方で人間とは違ったふうに考えるかなどといった描写は、誰一人していないのである。それがロレンスの場合は人間はそこには居ず、動物そのもののためにある世界を探っていることになる。まさにロレンスは人間の未知の領域に踏

み込んでいる。ロレンスがイタリアで体験した蛇との出会いの中にも、これが見られる。

一九一二年に初めてヨーロッパ大陸に渡った後、ロレンスは二年間をそこで過ごしたが、迫り来る第一次世界大戦の暗雲を避けていったん帰国し、大戦が終結した一年後の一九一九年の末に再びヨーロッパに向かう。そして一九二二年の初めまでシシリー島のタオルミナに滞在してイタリア各地を旅行した。

「蛇」の詩はこの時期に書かれたものである。ロレンスはイタリアで多くの動植物に出くわすが、特に蛇は彼の注意を引いたものであった。或る暑い夏の真昼間に、彼は水を飲み、宿の水鉢の所へ行き、そこで一匹の蛇に会う。彼は自分の受けた教育に従って、黄金色をしていたその蛇に棒切れを投げつけた後、

And immediately I regretted it.

I thought how paltry, how vulgar, what a mean act!

I despised myself and the voices of my accursed human education. ⁽⁶⁾

彼は自分のしたことが卑しむべき行為であると思い、自分が受けた呪うべき教育に従ったことを呪うのである。ここに見られる human education という言葉こそは、自然に対する従来の伝統的なあり方を示すものであり、黄金の蛇は毒蛇であって殺さなければならないという、人間中心主義に基づく考え方を象徴するものである。彼はその声に従って棒切れを投げつけた後、自分の受けた教育が呪うべきものだったと気づく。

human は animal に対する言葉であり、human education とは動物をないがしろにし人間だけに通用する教育のことである。ロレンスがこの詩で自分が受けた教育を見直していることが分かる。自分が受けた教育の見直しは彼のエッセイの中でも行われており、彼が独特の教育観を持っていたことが分かるが、とりわけ蛇については、

For he seemed to me again like a king,

Like a king in exile, uncrowned in the underworld,

Now due to be crowned again. ⁽⁸⁾

王冠を剝奪されて地下に追放された王として蛇を敬うという考えの中に、アニミズムが見だされる。ロレンスはアニミズムを通して、従来のヨーロッパの伝統の見直しを迫ったのである。

このことは「イギリス、わがイギリス」(‘England, My England’, 1922) という短編小説の中でもみられる。この作品はロレンスが一九一五年一月から七月まで、イギリスのサセックスのグレッタムに住んでいた時の体験に基づいて書かれたものであるが、女主人公の父親の、他の存在にはいっさい左右されずに生きてゆく力強い生活態度が、植物の力強い生き方にたとえられて、次のように表現されている。

He may live on for many generations inside the shelter of the social establishment which he has erected for himself, as pear-trees and currant bushes would go on bearing fruit for many seasons, inside a walled garden, *even if the race of man were suddenly exterminated.*⁽⁹⁾

ここには人間とは何の係わりもなく、毎年その季節が来ると繁茂している植物の姿が浮かびあがってくる。また一九二四年、ロレンスがメキシコへやってきた時に書かれた「メキシコの夜明け」(‘Mornings in Mexico’, 1927) という旅行記の第一章では、メキシコの先住民であるアステカ人の信仰を引き合いに出して、この地球の分裂のことを述べている⁽¹⁰⁾。ここには人類の滅亡という考えがある。地球の主人公が単に人間ばかりではなくもっと広い「生き物」であり、人間に限らなくてもよいという考えが見られる。また『恋する女たち』(‘Women in Love’, 1920) の中の主人公バーキンが、人は愛すると言いながら実際には憎しみ合っているのだから、この世はそのような人類の居ないさっぱりした世界となればよいと言うのも⁽¹¹⁾、同じ気分である。

ちかごろ最新鋭の撮影技術や生物学、地質学、生態学などの発達によって、われわれは今までとは違って、動物に全く気づかれずに動物そのものの世界を見ることができるようになった。そこでは大抵の場合人間に全然邪魔されずに動物たちが動き回っており、まさに動物だけの世界という感じがする。

ロレンスの描く生き物の世界もこれと同じである。ロレンスは二十世紀の初

めにすでに、二十一世紀の前夜である現在やっと皆が考え、やりだした事をおこなっていたことになる。このような中から、あのような独特の文学を生み出すのである。最近、このようなことがようやく一般の人びとにも分かってきて、人間だけでなく生き物全体が受ける、人間が作り出した現代文明の利器による、いわば負の遺産に対する償いの精神が芽生えてきている。またその償いはひとり人間のみに限られるものではなく、今地球上に生きていて、人間の作り出した公害のとばっちりを等しく受けている生き物すべてに対してなされなければならないのであり、ここから今よく言われる全ての生き物との「共生」の精神が出てくるのである。

ところで自然という場合、今述べた動物よりもむしろそれ以外の植物が大きな範囲を占めている。先に述べたように、人間よりもずっと前にすでに自然はあったが、この世に人間が出現して以来、人は自分の身の周りの自然と共に生きてきた。動物以外の場合はあまり動かないので、それと接していてもその動きをわれわれはともすると見逃してしまいがちであるが、最近になってこの植物の観察がこまかくなされ、色々なことが分かってきている。

今までみてきたように、その発端においてヨーロッパと日本では、ずいぶん自然に対する対処の仕方が異なっていたのであるが、では次にこのような違いはどのようなところから起こったのか、何がその背後にあるのかを考えてみたいと思う。

ヨーロッパはもともと一神教であるキリスト教に支配された地域であるため、一人の神のありかた、独裁的ありかたが人間にもおよび、自分自身を強く出し自分中心にやっていこうという生き方が、ルネッサンス以後もつよく打ち出された。

一方『古事記』でも分かるように、多くの神々をいただく日本では、多神教とアニミズムが支配してきた。このような状況のもとでは、支配者は独裁者というよりも、たかだか「世話役」程度にとどまり、一神教のように世の中を統一し、その頂点に立って他を支配していくというよりも、多くの仲間と協力してみんなでやっていこうという考えが支配的となる。しかしこの場合には何事もうまくいくかというところでもなくて、他との区別ははっきりしない代わり

に、今度は明確な自分というものを持たない結果、何か事が起こった時はっきりと No, と言えないことになる。すなわち付和雷同ということが起こって、結局世話役の言いなりになる危険がある。われわれが戦った太平洋戦争もこれが現実となったものであるし、また最近のオーム真理教もヨーロッパのように確立した自我をもつ以前に、科学に囚われてしまった事から起こった悲劇だったように思われる。いずれにしても長所・短所色々あって、どちらでなければならぬということはなかなかきめられないし、またそれはかえって危険で、両方の良いところをとっていけばよいと思われる。キリスト教徒でアメリカの或る神学者は日本の多神教を評価し、新しい多神論を説いている。彼は信仰と実生活を分けて、自我を越えた (Transpersonal) 瞑想を通して信仰が実現できるのだと述べている。面白いことにはここでも、ロレンスも言っているアメリカの先住民の宗教のありかたを一つのモデルとしているのである。

ところでロレンスは、前にも触れたように二十世紀に入ったばかりの時すでにこのことを知っていた。彼は当時の人びとがやった様に、動物や植物を人間よりも劣ったものとは見ず、人間界とは違った彼ら独自の世界をその中にかいま見たのである。そして、今われわれが感じる自然界の不思議をすでに感じ取り、これを楽しみ恐れたのである。

IV

交通・通信手段が著しい発展を遂げてきた現在、ものの考え方がグローバル化してきている。その中では、この世界は宇宙に漂う地球という一個の星に過ぎず、今のところ宇宙のどこを探しても同じものが見つからない、貴重な星にわれわれは生きているのだという考えを人間は持つにいたっている。宇宙のどこにも見つからないという事は、地球のような環境がごくまれにしか起こり得ない偶然の産物であり、それなりにまた壊れ易いものである事になる。地球に生き物が発生して高等動物へと進化していき、人間が支配して思いのままに地球を改造してきて二十一世紀にいたったが、ごく最近の地球環境問題をみるに及んで、もうこれ以上この地球を人間が独占していったよいものだろうか、

という事が考えられるようになってきている。そして人間だけではなく他の生き物と共に、この美しい地球を楽しむといういわゆる共生の考えが生まれている。

中世から近世にかけての近代科学によって、理性に基づく自然の征服がなされた。われわれはともするとヨーロッパは最初から立派な理性によって支配されていたと思いがちであるが、それはルネッサンス以後しばらくたってやっと実現されていくものである。まして中世などは、理性に基づかぬ諸々の事柄が右往左往していた。魔女はその典型的なものであった。魔女は近代科学の理性に基づく自然の征服に従わぬものであった。

ところでロレンスは二十世紀に入った後、なお科学に従わぬものとして残ったのである。その意味で彼は魔女的存在だと言えないだろうか。ロレンスの自然観がこの事を写し出している。ロレンスこそは二十世紀にもなって、科学がどうしても自分の領域に含めることのできなかった存在であった。

ロレンスの自然観と関わって、彼の考えは being と doing とに分けられる。H. M. Daleski によれば、彼の表す人間の活動は大きく being と doing の二つに分けられる。そしてこの二つを比べた時、より好ましい状態は、doing よりも being の状態であるという。そして良い仕事 (good works) や公共の福祉のためのどんな努力も「自己保存」のための労働にすぎず、そのようなものは人生において真に意味のあるものではなく、人間にとって真に重要な究極の目的は「花」であり、春の小鳥に象徴されるような羽ばたき歌う核心であり、月光のもとで野兎が自己に満ちあふれて爆発する being の魔術的ほとばしりであって、その時彼は a being となって物の間を自由に動き回るのだという。またそれは芥子の場合で言えば赤色になる事であり、キャベツにあっては火のような花を咲かせることであり、叙事詩『アイネイド』(Aeneid) に登場する英雄アイネアス (Aeneas) に失恋したカルタゴの女王ディド (Dido) にあっては、ディドになりきって運命のままに死ぬ事である¹⁹と言う。

この a being とは「一個の存在」という意味であり、これをロレンスは「血の意識」(blood consciousness) とか、男根の意識 (phallic consciousness) とか呼んでいる。そして doing はいわば人生の二次的目的のことであるという。

ロレンスがニューメキシコで体験した先住民の娯楽観も、このことと関連している。彼らの娯楽、特に太鼓に象徴される舞踊と音楽には、ヨーロッパにおけるようなイメージによる歌詞はなく、踊り手は意味を超越した宇宙の鼓動に身を委ねていると、次のように言う。

What are they doing? Who knows? But perhaps they are giving themselves again to the pulsing, incalculable fall of the blood, which for ever seeks to fall to the centre of the earth, while the heart like a planet pulsating in an orbit, keeps up the strange, lonely circulating of the separate human existence.

また、ヨーロッパの場合はたとえ辺境の地である外へブリデス諸島の漁民でも、その歌にはイメージが伴うという。この場合もアメリカの先住民の方を being, ヨーロッパの方を doing と考えることができよう。そして上の引用の中で、What are they doing? の答えとして「それは誰にも分からない」(Who knows?) と述べ、先住民がそのことよりもむしろ彼らの「在る」べき姿そのものを重要視していることを述べているのである。

そして二十一世紀になろうという今、ロレンスが論じたこの音楽論・演劇論はどうなっているだろうか。現在の世界の音楽の流れは先住民たちの太鼓などを取り入れて、昔のクラシック音楽に比べて「肉体」的なものとなっていると言えるだろう。この事を考えるにつけても、ロレンスの先見性に驚かされるのである。

この事の背景には、現代の人間性の尊重、階級的因習に絡む doing の墮落、この世に生を受けた事自体のもつ不可思議さ、宇宙の一員として生きること自体の持つ喜び、さらにはこれを全生物にまで拡張、植物、魚、鳥、蛇などをそれ自体として尊重することなどがある。

ロレンスの生き物観・アニミズムの中には、上で述べた共生の考えに通じる、いわばそのはしりの思想がみられる。人間だけでなく他の動物たちも、その生命は同じく大変貴重なものであり、それはこの地球上で生きていることの不思議さにも通じるのである。ここに二十一世紀を展望する人間観、いや生き物観をわれわれはみるのである。

筆者は以前「ロレンスの自然観」というタイトルの論文を書いたが⁶⁴、その中ではルネッサンスから起こった人間中心主義の犠牲にされた自然を、循環する時間や生の復活によってもう一度よみがえらせようとしたロレンスの考えを、人間と神や動物との係わりの中で探ったが、本稿ではさらにもう一步すすめて、それをアニミズムの観点から考えてみた。

註

- (1) D.H.Lawrence, *Sons and Lovers*, eds. Helen Baron and Carl Baron (Cambridge: Cambridge UP, 1992), p.152.
- (2) *Sons and Lovers*, p.152.
- (3) D.H.Lawrence, *The Complete Poems of D.H.Lawrence, I*, eds. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (London: Heinemann, 1972), p.296.
- (4) *The Complete Poems of D.H.Lawrence, I*, p.298.
- (5) D.H.Lawrence, *Selected Letters*, selected by Richard Aldington with an introduction by Aldous Huxley (Harmondsworth: Penguin, 1954), p.27.
- (6) *The Complete Poems of D.H.Lawrence, I*, p.351.
- (7) Cf. D.H.Lawrence, *Phoenix*, ed. Edward D.Mcdonald (London: Heinemann, 1961), pp.588-91.
- (8) *The Complete Poems of D.H.Lawrence, I*, p.351.
- (9) D.H.Lawrence, *England, My England and Other Stories*, ed. Bruce Steele (Cambridge: Cambridge UP, 1990), p.15. (イタリックスは筆者)
- (10) Cf. *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (Harmondsworth: Penguin, 1981), p.17.
- (11) Cf. D.H.Lawrence, *Women in Love*, eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen (Cambridge: Cambridge UP, 1986), pp.127-8.
- (12) Cf. H.M.Daleski, *The Folked Flame: A Study of D.H.L.* (Evanston: Northwestern UP, 1965), p.35.
- (13) *Mornings in Mexico and Etruscan Places*, p.58.
- (14) Cf. M.Koga, "D.H.Lawrence's View of Nature", *Journal of the Faculty of Letters*, The Faculty of Letters, Bukkyo U.LXXXIII (March 1999), pp.79-90.